

北緯33度10分30秒、東経130度25分30秒

柳川支部 片平真一 *

グーグルアース【Google Earth】(<http://earth.google.co.jp/index.html>)というフリーソフトがある。航空写真や地図などを組み合わせて、世界中の何処でも家庭のパソコンからお手軽にのぞけるソフトウェアで、例えば、住所を入力して「検索」をクリックすると、宇宙で地球を眺めている視点からその場所にズームイン！！する事ができる。それはまるで映画かドラマの1シーンを連想させてくれる。

さて、タイトルの場所(北緯33度10分30秒、東経130度25分30秒)は自分の現場の位置である。ここも例外に漏れず、住所(福岡県柳川市三橋町柳河)を入力すると現場上空にひとつ飛びできるのだが、まだ、そこには川が流れているだけだ。一級河川矢部川水系沖端川NO. 163地点、国鉄佐賀線跡等呼び方は他にもあるが、有明海沿岸道路に接続する一般県道柳川筑後線というのが今の呼び名だ。この現場は昨年4月に異動となった自分の担当になったものであるが、先に述べたように有明海沿岸道路に接続し、道路ネットワークを形成させる必要があることから、私が引き継いだ時点で開通まで2年しかない状況であった。ちなみに、引き継ぎの言葉は、「この道路を平成20年春に開通させる事」である。この台詞、昨年の福建で似たような話を聞いたことがあるなあ～と思った方もおられることでしょう。自分もその一人である。 沖端川を横断するこの場所には全長90.5mの橋梁が架かる予定であるが、2006年4月1日現在で橋脚のみが完成、A1橋台は約7ヶ月の工期で施工中、あとはA2橋台、上部工の施工が残っている状況であった。そして、この橋梁にはまだ名前が無かった。

名前・・・私達の生活の中で名前が付いていな

いと呼び方に困る。あれ、それetc、勿論このように置き換えることも可能だが、あくまでそれは一時的なものでしかない。試しに最初の方の文章の名詞を代名詞で置き換えると、『アレというコレがある。ソレやコレなどを組み合わせて・・・』というふうになり、全く意味がわからない。たかが、名前だが、あなどりがたしと言ったところである。その名前が新しく架かる橋梁にはまだ無いのだ。とりあえず、「沖端川に架かる予定の橋」では長すぎるので、「(仮称)柳河橋」と呼んでいる。橋の名前、それはどんな根拠を持って名付けられているのだろうか。

そもそも橋は人々の生活を支えるためのインフラであり、もともとは存在自体が無く、そんな時代には人々は浅瀬を渡ったり、舟渡しをしていたと考えられる。その後、人々の活発な行き来に必要が生じて出来てきたのではないだろうか。そして、そんな中、その川に架かる橋として一番目に架かった橋の名前が川の名前から名付けられたのではないだろうか。その後、橋の数が増えるにつれ、地名であるとか、その橋を架ける事に尽力した人の名前などがつけられたのではないだろうか、と思うのですが、皆さんはどう思いますか？

実際にどんな名前が橋梁についているかを調べてみることにした。まずは、柳川筑後線における橋梁名を調べてみると、中島橋、太田川橋、高牟田橋、東前橋、大請橋、並石橋、木ノ元橋、ハタチ橋、菰添橋、松田橋、金屋久橋(柳川土木管内分のみ)。次に、沖端川に架かる橋梁名を調べてみると、下流から三明橋、有明橋、筑紫橋、大門橋、出の橋、高畑大橋、矢加城橋、御鷹見橋、磯鳥橋、島町橋、沖の端川橋、新村橋、古島橋、中山

下妻橋、行基橋。さらに今回橋が架かる大字柳河にある橋梁名を調べてみると、野開橋、清蔵橋、新小坪橋、藪地橋、連蒲池橋、小塚橋、水深橋、矢加部橋、村中橋、御鷹見橋、矢加城橋、高畑大橋、外町橋、新船津橋、小坪橋、と言った結果であった。

柳川土木に異動となってなんとなく橋が多いことは分かっていたつもりだが、改めて調べてみるとかなりの数だ。しかも大字柳河だけで15橋もあるのは驚きだ。また、沖端川には沖の端川橋という橋梁名は1橋だけであったし、その他は地名がもとになって橋梁名が付けられているものも多い。そして、注目なのは「行基橋」。中学校の社会科で聞いたことがある名前である。ちなみに行基(668－749)とは、奈良時代の僧侶で、681年に出家後、関西地方を中心に貧民救済や治水・架橋などの社会事業に活動し、745年には日本最初の大僧正になっている。その行基が架橋に関わったのではないかと調べてみると、残念ながら、瀬高地方に来た史実はなく、架橋には直接関わっていない事が分かった。ちょっと残念な結果だ。それならば、どうして「行基橋」なのだろうか？と思って、さらに詳しく調べてみると、(瀬高の本郷の)巨刹九品寺の僧達が仏道精進の為、沖の端川の河辺で「行」をしていた事にちなんで「行ヶ橋」と呼んでいたのを、仏教信者が行基の徳をしたい、行基橋に昇華させたものと考えられている事が分かった。直接の架橋には関わっていないものの、行基という人の影響力の大きさを現代でも改めて認識させられたところだ。

さて、私の現場である。現在、付近に架かっている橋梁名と(仮称)柳河橋との名前が重なっているという事は無いことが分かった。しかし、日本語は奥が深い。私はある時、その言葉を耳にしまった。その言葉は「柳川橋」である。文字で記すと全く違う言葉だが、発音すると全く同じ『yanagawa-ba

shi』なのである。一体、柳川橋とは！？

この人騒がせな柳川橋とは、一級河川矢部川水系二ツ川に架かる橋梁であることが分かった。しかも交差点名にも用いられている事でもある。もし(仮称)柳河橋が仮称でなくなったら、「yanagawa-bashi」が2つに増えることになり、『さんぽんがわの柳川橋』と『さんずいがわの柳河橋』と呼ばれることになるだろう。

柳川と柳河、発音は同じだが、使用されている漢字が異なる。これは、何か意味があるのでは？と考え、川と河の違いを調べてみた。すると、漢語林「大修館書店」によると、『川』は①かわ。水流。②あな③はら。平原。④四川省の略称であり、一方『河』は①川の名。黄河の古名。もと、長江を江と呼ぶのに対し、黄河は単に河と読んだが、後世、河を(大きな)川の意に用いることが多くなってから黄河と呼ぶ。②かわ。(ア)小さいのを川、大きいのを河という。今は混同して用いる。「河川」。(イ)水利・かんがい・航行などのため、陸地を掘って作った水路。ほりわり。「運河」。③あまのかわ。天の川。銀河。天漢。と記載されていた。意味からすると「やながわ」の「かわ」の字は「河」の方がふさわしいのではと思うところだが、今は混同して用いられる旨が記載されているので、意図して使い分けをしていたのかも分からない状況だ。

それならば、現在の「柳川市」の『柳川』は何に由来しているのだろうかと思って調べてみると、①川の中に足場を組み、木や竹を用いて、すのこ状の台を作った梁(やな)という構造物を設置し、上流から泳いできた魚がかかるのを待つという梁漁が付近の川で盛んであったこと(鎌倉時代後期の史料に「築河(やなかわ)」あるいは「梁川」などの表記あり)や、②川辺に柳が多く植えられていたこと、また、③音楽寺(現中町八剣神社)の裏の流れ(水路)が「柳川」といわれていたことが「やながわ」という地名の語源になっているそうです。

「柳川」と「柳河」の使い分けは分からずじまいであつたが、橋梁の名前ひとつとっても、その地域を深く知るきっかけとなってくれる。この文章が福建に記載される頃に正式名称が決まっているかは不明ですが、今後も折に触れ、その地域をよく知る機会を逃さないように事業に取り組んでいきたい。

写真は(仮称)柳河橋の架橋位置における平成18年10月末現在の写真です。A1橋台が完成、残りはA2橋台と上部工です。

◆参考◆

瀬高町の地名の話(鶴記一郎氏)

柳川市HP

(<http://www.city.yanagawa.fukuoka.jp/index.html>)



A2橋台施工と上部工架橋を待つ(仮称)柳河橋

* 柳川土木事務所道路課県道建設係